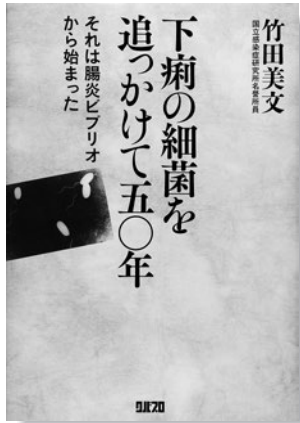


## 書籍のご紹介

# 【下痢の細菌を追っかけて五〇年 それは腸炎ビブリオから始まった】

著者：竹田美文（国立感染症研究所名誉所員）



発行所：株式会社 クバプロ

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋3-11-15 UEDAビル6F

電話：03-3238-1689 FAX：03-3238-1837

<http://www.kuba.co.jp>

定価：本体2,800円（税別）

本書は目次のごとく著者の自叙伝の形式をとっているが、実はわが国の過去50年間の「下痢原因細菌の研究」のドキュメンタリーである。

幼少期に赤痢に罹り、母親の献身的な看病によって一命を取り留めた著者は、この経験を原点として「人に役立つ仕事として医学」への志を固め、大学へ進学する。

そこで恩師藤野恒三郎と運命的な出会いがあり、医学細菌学への道を選び、以後「ぶれることなく、凜として下痢原因細菌を追っかけて」、わが国の細菌学研究的の嚆矢となった記録である。

著者は、医学細菌学研究の本流を受け継いで、大学・研究所の教授として研究・教育・学会を先導し、厚生行政の長としてわが国の感染症研究を主導してきた。細菌研究のランドマークは腸炎ビブリオの下痢毒素の発見にはじまり、各種病原大腸菌の下痢毒の同定・診断法の確立、新コレラ菌の発見など先端的研究手法と伝統的な手法を駆使して貴重な功績をあげた。厚生行政では腸管出血性大腸菌O157の感染について早くから警告を発しており、堺市、岡山県邑久町における大流行に対処し、全国に散発する小流行の警告・対処など、故多恵夫人らとともに検査技術の啓発を進めながら、検査室と疫学データを解析して、その対応策を主導してきた。これらの流行を機に「伝染病予防法」の改正の委員長に要請され大任を果たした。

この間に最愛の多恵夫人をがんで喪<sup>うしな</sup>い、夫人を看病しながらの3年間の激務をこなした生き様は特に感銘深く、著者の人間性に強く心打たれる。

学生時代に英語通訳資格を得て、堪能な語学力で世界各国の研究者と広く深い交流を続け、WHO、ICDDR,B、日米医学コレラ部会、アジア下痢症会議、インド国立コレラ研究所など国際機関への強い指導力を発揮して国際厚生行政を推進している。

本書には研究者の「生き方の手本」が示されており、次世代に続く医学研究者に是非読んでほしい一冊である。

筑波大学名誉教授 林 英生

## <目次>

- 第1章 医学部へ進学
- 第2章 藤野恒三郎先生の弟子となる
- 第3章 米国留学
- 第4章 大阪大学微生物研究所時代
- 第5章 東京大学医科学研究所時代
- 第6章 京都大学医学部微生物学教室時代
- 第7章 国立国際医療センター研究所時代
- 第8章 「伝染病予防法」の見直し
- 第9章 国立感染症研究所時代
- 第10章 岡山大学インド感染症共同研究センター時代
- 第11章 思い出の海外旅行
- 第12章 私の考え